

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 宮本佳明

論文題目：「環境ノイズエレメント」に見る風景の加工性についての研究

本論文は、論者が提唱する「環境ノイズエレメント」という概念が、実際に建築や都市をデザインするにあたり、いかなる有効性を持ちうるかを検証した研究である。

本論文は、資料編を含む全5章で構成されている。

第I章では、研究の目的と位置づけを明らかにし、具体的な研究方法について解説している。

ここでは「環境ノイズエレメント」という概念の前提として、新しい風景は古い風景の加工によって生まれる、という風景の発生構造についての認識が主張される。

研究方法の要点は、「(直感的に)違和感のある風景」の成立経緯の徹底した調査・分析である。国内外でおよそ400あまりの事例を研究対象として選んでいる。

第II章では、環境ノイズエレメントの概念の定義を整理し、環境ノイズエレメントという視点の都市計画的な有効性について考察している。

現代都市は「計画」にもとづいて建設されてきたが、現実の都市は、様々な要因によって単一の計画によって達成されてはいない。そこではさまざまなノイズによって計画が志向し誘導しようとした風景の秩序に「ほころび」が生じている。多くの場合、そのようにして生まれた風景は、ある種の異物感をともなって存在している。そのような計画のほころびを環境ノイズエレメントと呼ぶ。

環境ノイズエレメント概念の有効性は、風景にアイデンティティを付与し、場所のイメージアビリティを高めることに貢献している点にある。

「ノイズ・シティに向けた予備的考察」なる小論は、風景の奥に潜む意図の重層性を問い直したものである。古い環境を「素材」と見なし、物理的に「加工」ないしは意味機能を転換することによって、新しい環境が成立するというのがこの小論の骨子である。

以上の考察を踏まえ、環境ノイズエレメントのカテゴリライズが試みられている。風景に2次的に生ずる異化作用をより効果的に説明するために、素材性と加工性という即物的な2つの分類軸を用いている。素材性は、大きく T. 自然地形(topography) C. 土木構築物(civil engineering structure) H. 文化財(heritage)という3項目に分類される。加工性は、t. トレース (trace) c. 切断 (cut) に二分される。具体的な「素材」が、「トレース」「切断」といった具体的かつ人工的な「加工」を受けることによって異物感が発生していることが環境ノイズエレメントの最大の要件である。

第II章の最後では「既往研究との関連」がまとめられている。ここでは、大きく(1)環境の観察と

記述に関する既往研究、(2) 歴史の合成に関する既往研究、(3) 環境の編集可能性に関する既往研究という風に分け、本研究との関連について考察を加えている。

第III章は、本論文の各論に相当する部分である。第II章で示された素材性×加工性にもとづくカテゴリーにしたがい、環境ノイズエレメントの事例を、詳細に調査・分析している。

第IV章では、本論文の結論として、ここまでの研究でえられた知見を、実際に都市や建築のデザインに応用する可能性について考察している。

ここで提示される「クッキングアーバニズム」というデザイン手法は、環境ノイズエレメントの概念が普遍性をもった設計ツールとして手軽に利用できるように、「手法」としての整理し直したものである。環境ノイズエレメントの[素材×加工]という発生構造が、[食材×調理]という料理の過程に似ていることから、身近な調理方法に喩えてクッキングアーバニズムと呼んでいる。

クッキングアーバニズムによるデザインは「創造」というよりむしろ「編集」に近い。そのツールは、建築的、都市的、さらには地政的スケールにおよぶブリコラージュである。ありとあらゆる環境要素を素材として繰り込み、連鎖反動的にそれらの資材性を最大限に発揮させる。そこでは歴史さえも加工対象である。その結果、アウトプットは複合歴史痕跡主義とでも呼ぶべき様相を呈するものとなる。それは人工的であるか自然発生的であるかを問わず、異なるフェイズのもとで発生した意図が重層してひとつの環境が成立すること、複数の意図の描き重ねとその積極的な編集によって、オールマイティな単一のシステムのもとではえがたい風景の多層性をもたらされる可能性を示唆するものである。環境ノイズエレメントという概念にもとづいてデザインされる都市を、ノイズ・シティと呼ぶならば、それは都市のテーマパーク化という危惧される退屈な未来を逃れる唯一の方法であるように思われる。そこでは、時代を超えた複数の意図の重層が招来され、時間が建築家や都市計画家の代わりを務めることになるというのが本章の結論である。

第V章では、研究対象として扱った国内外の事例全 400 強のリストと、その中でも特に興味深い国内の事例 200 件について、地図、データ、解説等を付したものを「環境ノイズエレメント 200 選マップ」というかたちにまとめて掲載している。

以上、本論文は、環境ノイズエレメントという概念によって、これまでの単一で均質的な都市空間をうみ出してきた近代的「計画」概念を批判するとともに、既存の都市に潜む重層的でアイデンティティのある空間を発見・創造する方法を提案している点で、社会的意義の高い研究である。この研究によって、これまでネガティブに捉えられてきた都市空間の意味を再発見する道が拓かれ、都市計画・都市デザインの新しい方法へと展開する可能性が示されたといえるだろう。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。